

# The Miller's Tale における人物描写の比喩的表現

笹本長敬

粉ひき屋が語る話 *The Miller's Tale* について、Chaucer は自ら *The Miller's Prologue* において「自分の流儀で低級な男がする話をした」“tolde his cherles tale in his manere”(3169)<sup>1)</sup>と云って、その話を繰り返すのは残念に思うが、聞きたくない人は別の話を選んでほしい、とチョーサー流のアイロニーをこめて言い訳をしている。さらに彼はこの巡礼の粉ひき屋を「品のない低級な男」“cherl”(3182)と断定する。ここで使われている低級な男がする低俗な話たる“cherles tale”(=churl's tale)というのは、12、13世紀にフランスの北部や東北部で流行した、低俗な内容の韻文の風刺的な滑稽話ファブリオ *fabliau* の範疇に入れるべき話のことである。チョーサーがファブリオ仕立てで *The Canterbury Tales* に書いた作品は5つある<sup>2)</sup>。ところがチョーサーの手にかかると、“cherles tale”は必ずしも低級な話とは限らなくなる。現代の批評家たちのほとんどは、「粉ひき屋の話」について高い芸術的レベルまで高められた作品であると言い切る。たとえば、E. M. W. Tillyard は“it is the most brilliantly plotted of all the *Tales* and the character-sketches in no way yield to those of the Prologue”<sup>3)</sup>と明言し、E. T. Donaldson は“the highest artistic expression of the *fabliau*”<sup>4)</sup>と見ているし、Charles Muscatine は“the *fabliau* at the stage of richest elaboration”<sup>5)</sup>と云っている。彼らがこのように称えるのは、ファブリオにおいて往々にして見られる単純な筋立てを、チョーサーは細かいところまで気を配り、「粉ひき屋の話」の基となったファブリオ<sup>6)</sup>よりももっと巧みに、しかも客観的につじつまを合わせ、時には伏線を配してリアリスティックに話を作りあげたからである。そのうえ彼はそれぞれの登場人物を特徴づけて個性化し、対話を練り、それぞれの性格を確立したのである。

---

1) 以下、引用はすべて Larry Benson (Gen. ed.), *The Riverside Chaucer*, 3<sup>rd</sup> Edition (Boston: Houghton Mifflin, 1987) による。

2) *The Miller's Tale*, *The Reeve's Tale*, *The Cook's Tale*, *The Summoner's Tale* and *The Shipman's Tale* が挙げられる。

3) E. M. W. Tillyard, *Poetry Direct and Oblique* (London, 1948), p. 215.

4) E. T. Donaldson, *Chaucer's Poetry*, 2<sup>nd</sup> Edition (New York: John Wiley & Sons, 1975), p. 906.

5) Charles Muscatine, *Chaucer and the French Tradition* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1966), p.224.

6) この話によく似たファブリオはフランドルやイタリア、ドイツに4種類存在する。しかし筋の種本とはいえない。W. F. Bryan and Germaine Dempster (eds.), *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales* (New York: Humanities Press, 1941). Larry D. Benson and Theodore M. Andersson (eds.), *The Literary Context of Chaucer's Fabliaux* (Indianapolis & New York: The Bobbs-Merrill, 1971). Helen Cooper, *Oxford Guides to Chaucer—The Canterbury Tales* (Oxford: Clarendon Press, 1989). Robert M. Correale and Mary Hamel (eds.), *Sources and Analogues of The Canterbury Tales II* (Cambridge: D. S. Brewer, 2005).

「粉ひき屋の話」には、登場人物の興味だけでなく、人間のおろかさをアイロニカルに表す物語の面白さが見出される。そしてそれぞれの人物の特徴を表現するのに、鳥や動物、あるいは植物を多用して、それらになぞらえながらその人物の性格や言動を具体化している点が印象的である<sup>7)</sup>。言い換えれば、それらの比喩的表現 figures of speech に key words が隠されていて、生き物の姿、動きそして民間伝承、あるいはその印象から読者のイメージがふくらんでいく。そこでこの小論では主として比喩的表現とそのイメージの面から「粉ひき屋の話」の登場人物像を考えてみたいと思う。

## 1

この話の設定はファブリオの常套形式に則っている。場所は大学町オックスフォードである。ロマンスと違って現実の町が設定され、主たる登場人物は老木工で下宿屋の John、18歳の若い妻の Alison、彼女の若い恋人 2人、そのうちの一人はオックスフォードの学生 Nicholas、もう一人は教区教会書記 Absolon の計 4人である。移り気な若い妻に関係する恋の三角関係が進行し、それにかからむわいせつな話として展開し、老人の夫は cuckold となり、犠牲になるが、2人の若者もそれぞれ罰をうけ、みんな笑いの対象になるのである。

それでは、チャーサーがすばらしい character sketch の冴えを見せる若妻アリスン（この名は「喜びの」を意味する古期フランス語に由来する<sup>8)</sup>）から見ていこう。彼女の身体的特徴はこうである。

若妻アリスンは「イタチ」“wezele” (3234) のように優美でほっそりした体つきをした美しい女性である。「朝の搾りたてのミルクのように白いエプロン」“a barmcloth as whit as morne milk” (3236) や、白色と黒色がよく目立つ衣服を身に着けている。彼女の二本のまゆ毛は引き抜かれて細くしてあり、湾曲して「リンボク」“sloo” (3246) のように黒く、見栄えは「早熟の梨の若木」“newe pere-jonete tree” (3248) よりよく、「雄羊」“wether” (3249) の毛よりもふんわりとしていた。顔色はロンドン塔で「新しく鑄造されたノーブル金貨」“the noble yforged newe” (3256) より輝いていた。歌声は納屋の上にとまる「ツバメ」“swalwe” (3258) のように声は高く、躍動感があった。このようにアリスンについての人物描写は動植物の直喩や象徴を使って、アリスンの姿をイメージとして生き生きと浮かび上がらせている。描写はさらに続き、修辞技法として「子ヤギあるいは子牛」“kyde or calf” (3260)、<sup>8)</sup>「たくさんのリンゴ」“hoord of apples” (3262)、<sup>8)</sup>「子馬」“colt” (3263, 3282) の動植物の名が登場している。最後に

She was a prymerole, a piggesnye, (3268)

7) この小論を記すに当たって、Janette Richardson, *Blameth Nat Me--A Study of Imagery in Chaucer's Fabliaux--* (The Hague・Paris: Mouton, 1970), pp.159-69 に負うところが大きい。

8) Jacqueline de Weever, *Chaucer Name Dictionary* (New York & London: Garland Publishing, 1996) p.19.

と隠喩を使って、語り手は彼女を「桜草」“prymerole” (なお“piggesnye”は「かわいい子ちゃん」(愛称)の意)になぞらえる。さらに彼女は「ハツカネズミ」“mous” (3346)、「小鳥」“bryd” (3699, 3726, 3805)の動物にも譬えられる。

このようにして、動物の「子ヤギ」、「子牛」、「子馬」だけでなく、「朝の搾りたてのミルク」、「早熟の梨の若木」、「新しく鑄造されたノーブル金貨」、早春の花である「桜草」に譬えることによって、若さや瑞々しい潑刺とした活力ある「若い女の子」“wenche” (3254)としての魅力を出すことに成功している。

アリスンの描写に直喩や隠喩、象徴として使われている動植物を見ると、農家とその庭、さらにその周辺の野や林の自然の中に見かけるものばかりである。したがって彼女は自然のなかに育った田園の若い元気のよい女の子というイメージが浮かぶ、さらに彼女の口の匂いは田舎のそれである。「地酒や蜂蜜酒のように甘く」“sweete as bragot or the meeeth” (3261) また「干し草かヒースにたくさん貯蔵されたリンゴ」“hoord of apples leyd in hey or heeth” (3262) のようである。肌触りは「雄羊の毛よりもふんわり」“softer than the wolle is of a wether” (3249)として、眉毛は「リンボクのように黒い」“blake as any sloo” (3346)。そしてこのような直喩から彼女は官能的成熟の雰囲気も備えているというイメージが浮かぶ。そこで彼女の描写の最後は次のような表現となる。

For any lord to leggen his bedde,  
Or yet for any good yeman to wedde.  
(3269-70)

彼女は領主やヨーマンも娶りたくなるほど魅力的ないい女なのである。チョーサーが冒頭部分で格言的に“Men sholde wedden after hire estaat, / For youthe and elde is often at debaat.” (3229-30) というように、これから生殖旺盛になっていく彼女が生殖不能になりつつある老人と結婚することは、自然の調和を侵すことになる。彼女は彼女にふさわしい相手を求める必要がある。なお、政略結婚の時代である中世のヨーロッパでは、夫と妻の年齢の開きが大きいのはごく普通のことだった。

彼女のイタチのイメージには上述の身体的イメージが浮かびあがることも然ることながら、イタチはよくふざげ、跳ね回り、じゃれ回り、獲物に近づくときはこっけいな身振りをする動物である。そこでイタチの直喩によって彼女の若々しい動物のように遊び戯れる動きや軽佻浮薄な有様が暗示されるのである。アリスンも元気な子馬のように「気まぐれ」“wynsynge” (3263) で、ニコラスにお尻をしっかりと抱かれると頭をそらせて身をねじる (3283) 敏捷な動きをする。イタチは家の一隅から一隅へ実に巧妙に移って每晚異なる巣で寝るといわれる<sup>9)</sup>。結局、イタチはファブリオの性的に魅力があって移り気な若い女性にふさわしい象徴として使われる。この動物的性質 ぶざけるのが好きで、巧みに逃れるのがうまくて、人に慣れない性質 は、他人には不愉快であるが、アリスンには存在するのである<sup>10)</sup>。

9) T. H. White (ed), *The Bestiary, A Book of Beasts* (London, 1954), p. 92. Janette Richardson, *ibid.*, p.163 より。

またアリスンの歌声がツバメのさえずりとしてイメージされる。これもアリスンの振舞いを皮肉っぽく譬えていることが明らかである。ツバメは移り気の特徴であるだけでなく、軒の巣が落ちそうになると、その巣を捨て去ると一般に信じられた<sup>11)</sup>。

そういうわけで、ここに野育ちの、元気でしかもあだっぽくて、コケティッシュな面をもつ女としてのアリスンが見えてくる。池上忠弘名誉教授は彼女のことを簡潔に言い表している。「男を引きつけ、近づきやすく挑発的で、すばしこく抜け目なく元気一杯行動するが、自己防衛本能がある。田園的牧歌的環境に囲まれているが、やはり街に住む女性である。」<sup>12)</sup> さらに付け加えれば、好き嫌いのはっきりした態度をとる女性である。

## 2

アリスンとの恋の勝利者ニコラスについて述べる前に、ニコラスのライバルでアリスンに嫌われた教区教会の書記のアブソロンについて考えてみよう。旧約聖書ではアブソロンという名はもちろんダヴィデのお気に入りの息子(三男)の名で、イスラエルでもっとも美しい男であった。そして美しい豊かな髪をもつことでも有名だった。このアブソロンはそれに因んで名付けられたことは確かである。それだけでなくダヴィデの息子の格好を真似ているふしがある。彼はまずおしゃれで愉快的な若者として描かれている。髪は金髪の巻き毛で、扇のように広く伸ばし、筋目正しくむらなく分け、「顔は紅顔で、目はガチョウのように灰色」“His rode was reed, his eyen greye as goos” (3317) だった。直喩を用いての彼の目の色は、巡礼の女子修道院長 the Prioress の目の色を思い起こさせる。靴の革にはセント・ポール大聖堂の窓の飾り格子模様を刻み、赤い長ズボンをはき、レース飾りがびっしり付いたライトブルーのチュニックをきっちり着込み、その上の派手な法衣は「枝に咲く満開の花のように真っ白」“As whit as is the blosme upon the rys” (3324) だった。その上、理髪(後の「鬚」との不名誉な遭遇を予期して仕立てられたように思われる)ができ、放血もでき(3326)、不動産譲渡証書が作れ、多種類の踊りが踊れ、弦楽器を演奏しながら歌が歌える、なかなか器用で多才な男である。また、酒、そして特に女が好きで、香のようないい匂いは好きだったが屁の臭いは嫌いである(これは後の伏線となる)。話し方にうるさく、気むずかし屋だった。

彼は教区教会内でアリスンを見て恋をし、色目をつかって誘惑しようとしたが、むだであった。語り手は皮肉を込めて言う。

I dar wel seyn, if she hadde been a mous,  
And he a cat, he wolde hire hente anon.

(3346-47)

10) Beryl Rowland, *Blind Beasts--Chaucer's Animal World--* (Kent, Ohio: The Kent State University Press, 1971), pp. 27-29.

11) T. H. White (ed), *ibid.*, p. 147. Janette Richardson, *ibid.*, p.163 より。

12) 池上忠弘、「4人の人間関係と知恵くらべ チョーサーの『粉屋の話』を巡って」、(中尾佳行、菅野正彦他編、『テキストの言語と読み 池上恵子教授記念論文集』、英宝社、2007)、286ページ。

語り手は「若妻がネズミで、彼が猫であったなら、すぐに捕らえただろう」と、アブソロンを「猫」(3347)に譬えるが、仮定法過去完了形を用いて述べているので事実とは反対である。彼は猫に当てはまらないのである。アブソロンはアリスンに激しく言い寄り、よく見せるために「ナイチンゲール(小夜鳴鳥)のように声高く美しく歌ってみせ」“He syngeth, brokkyng, as a nyghtyngale” (3377) たり、「甘口のワインや蜂蜜酒や香料入りのビール」“pyment, meeth, and spiced ale” (3378) を付け届けしたりする。彼は美声の象徴ナイチンゲールさながらに歌い、当時としては贅沢な飲み物を贈るといふ、涙ぐましい努力にもかかわらず、「彼女(アリスン)はアブソロンをばかにする」“she maketh Absolon hire ape” (3389)。E. T. Donaldson は、チョーサーは中世のヒロインによく使われる常套語句を使ってアブソロンについて説明していると指摘し、「顔色」“rode”、「灰色の目」“greye eyes”、「枝の満開の花のように白い」“whit as is the blosme upon the rys” という語句はそうであるという<sup>13)</sup>。そのうえアブソロンの髪は、金色に輝き、扇のように大きく広く伸びるが、それは中世の美しい女性たちの髪形であり、めかし方は女性的である。彼はめかし屋で、外見に対して潔癖すぎるくらい関心をもち、甘い人工的な匂いを好む。その反対の臭いを嫌悪する。彼は自分自身を旧約聖書の『雅歌』の若者に見立て、自分自身を「子羊」“lamb” (3704)(従順の象徴)と「キジバト」“turtel”(= turtle dove)(3706)(伝統的に女性への貞節を連想させる鳥)になぞらえて、甘い求愛の言葉を披露して、宮廷風恋人のようにやるせない気持ちを訴える。彼は常に女々しい態度をとりつづける。

彼は外見に関しては異彩を放つほど華やかに着飾るが、それは特に教会にやってくる異性を引きつけるためであろう。大好きなアリスンに対してこう歌って気を引こうとする。“I moorne as dooth a lamb after the tete. / Ywis, lemman, I have swich love-longyng / That lik a turtel trewe is my moornynge. / I may nat ete na moore than a mayde.” (3704-07) と。自分自身を子羊とキジバトに譬えたり、小娘と比べたりして、女性的で男らしさが伝わってこないため、アリスンを引きつけることができないのである。

結局、宮廷風の型どおり、意中の婦人アリスンにキスを許されるが、とんでもないところにキスをさせられて、嫌われていることが分かり、恋の病は消しとび、さらに念を入れるように、今度は彼の嫌悪する尻をニコラスからまともに受けてしまう。恥をかかされて怒り心頭に達したこの不幸な恋人が、恋敵に仇を討てたことはせめてもの救いである。アブソロンについて、斎藤勇名誉教授の言葉をお借りすると、「本人が優雅な恋愛の立役者として伊達を気取り自信満々、しかし実は第三者から見ればまことに憐れ」<sup>14)</sup>である。だが一方で、彼は、英語でいえば ridiculous、つまりばかげた人物に映る。彼は“ape”「サル」(3389)(proverbial dupe の象徴)<sup>15)</sup>に譬えられるように、とんだ三枚目に仕立てられている。アブソロンはアリスンとは根本的に合わない性質をもっている。アリスンは野育ちの自然児な

13) E. T. Donaldson, 'Idiom of Popular Poetry in the Miller's Tale' in *Speaking of Chaucer* (London: The Athlon Press, 1970), pp.20-22.

14) 斎藤勇、「アブソロンと『雅歌』」(石原田正廣、伊藤孝治他編『英語・英文学への讃歌 - 廣岡英雄先生喜寿祈念論文集 -』、英宝社、1994)、43ページ。一語だけ漢字に変えた。

15) Beryl Rowland, *ibid.*, p.32. Ernst Robert Curtius (trans. by W.R. Trask), *European Literature and the Latin Middle Ages* (New Jersey: Princeton U.P., 1963), pp.538-39. 笹本長敬、「チョーサーの動物表現について - サルと馬を中心に -」、『大阪商業大学論集』第112・第113号合併号、1999、651-54ページ。

のに、一方アブソロンの方は人工のものを嗜好する都会っ子である。彼女は庶民の出で、奔放で野性的に振舞う、一方彼は教会勤めで、宮廷風を気に入り、儀式的に振舞う。こういうところからチョーサーは得意の対立や対照を駆使した表現描写によって皮肉なおかしみを生み出すのである。

## 3

ニコラスについて言うと、ニコラスという名は学者の守護聖人である聖ニコラスに因んでつけられているようである。その名は学生のニコラスにふさわしい名である。ここでは名前の前に *hende* という形容辞をあだ名のように常につけて *hende Nicholas* と呼ばれている。*hende* には “courteous or gracious, gentle, nice, handy or near at hand” などのいろいろな意味があり<sup>16)</sup>、語り手の粉ひき屋は *hende* のこれらの意味を臨機応変に使い分けながらニコラスの性格づけをしている。ニコラスはオックスフォードの学生で、天文学について知識があり、さらに「内緒の恋愛遊戯や恋の火遊びによく通じていた」“Of deerne love he koude and of solas” (3200)。甘い香りのする菓草を飾って部屋中を甘く匂わせ、弦楽器をかき鳴らしながら美しく歌うことができた。彼については動物などの比喩的表現でほとんど描写されていない。彼はアブソロンほど多才でなく、単に遊び好きで好色好きの「男前の学生」“sweete clerk” (3219) だった。彼に関する動物の比喩的表現は、彼が「白い雌鴨が雄鴨の後を追うように楽しく泳いで行けるでしょう」“Thanne shaltou swymme as myrie, I undertake, / As dooth the white doke after hire drake” (3575-76) と、つがいのカモの泳ぐ姿の譬えを使って、ノアの洪水になったときの対処の仕方を面白そうに大工に説明するだけである。

しかし、彼は猫の性質をもっている。

And therto he was sleigh and ful privee,  
And lyk a mayden meke for to see.  
(3201-02)

「ずるいところがあって、なかなか手の内をみせず、見たところ少女のごとくおとなしい」という彼の性質は、動物でいえば猫に近い。「少女のごとくおとなしい」のも「見たところ」という表面上であって、まさに猫かぶりの振舞いである。アブソロンにはない性質である。deerne love 「内緒の恋愛遊戯」に長けた彼は、アリスンの夫ジョンの留守中に、アリスンを誘惑し、いちゃつくのである。

And prively he caughte hire by the queynte,  
And seyde, “Ywis, but if ich have my wille,

16) E. T. Donaldson, *ibid.*, p. 17.

For deerne love of thee, lemman, I spille.”  
And heeld hire harde by the haunchebones,  
(3276-79)

ニコラスのこの行動は猫の獲物を捕らえる技術を彼がもっていることを示している。そしてニコラスは、アリスンと安心して楽しめるようにと、ジョンをだます策略を練るために自分の部屋に閉じこもり、じっとして土曜・日曜を過ごすことになる。ところがその部屋のドアの下部には猫がよく出入りする穴があった。これによって猫がドアの穴から入って、部屋の奥に潜んで、丸くなる姿が想像できる。ニコラスはそういう猫の行動とそっくりである。またニコラスがアリスンと楽しむために、桶からはしごを伝って大工のベッドへ「忍び足で降りる」“Doun ... stalketh” (3648)。その足取りは、まさに猫さながらである。その後をニコラスの好きなアリスンが「足音を立てずに足早に降りる」“ful soft adoun she spedde” (3649)。その格好は従順なネズミに似ている。そして、前掲引用(4ページ)の「若妻がネズミで、彼が猫であったなら・・・」(3346-47)の譬えも勘案すると、猫はアブソロンでなく、ニコラスこそふさわしいのである。ニコラスの場合、動物の比喩的表現はあまり見られないが、彼の行動や遠まわしの暗示によって動物(猫)のイメージが浮かび上がってくる。ニコラスのすばやい積極的な言動と男らしさこそ、アリスンの自然育ちの野性的な性質に合致するのである。そしてなぜかアリスンはニコラスに従順なのである。

4

老大工ジョンの性格をあらゆる動物による比喩的表現はみられない。彼はファブリオに登場する老人の典型である。したがって彼の性格は読者にはもう前もって分かっているのである。彼は若い女を妻に迎えて、新妻にぞっこん惚れ込むが、どこか間抜けで無知である。しかし若い妻は若くて移り気であると信じこみ、自分は年寄りのため、妻を寝取られる男になるのではないかと心配して、妻を籠の鳥のように監視する疑い深い男である。一方で彼は若い学生ニコラスを下宿させるような人の好いところがあり、また人のいうことを信じやすいところがある。彼は学問を軽蔑する。したがって古人の大事な教えを知らなかったし、天文学については無知であったために、ニコラスの策略に簡単に引っかかって信じ込み、後でばかげてこっけいな不幸の落とし穴に落ちるのである。チャーサーはジョンについて予言してこう言う。

He knew nat Catoun, for his wit was rude,  
That bad man sholde wedde his simylytude.  
Men sholde wedden after hire estaat,  
For youthe and elde is often at debaat.  
But sith that he was fallen in the snare,  
He moste endure, as oother folk, his care.

(3227-32)

彼は無学であったから、似た者同士結婚すべきであると言った、カトーの言葉を知らず、自分の分に応じて結婚しなかったから、罨にはまる羽目になった、と。

ジョンは信じやすさと無知によって、妻に浮気されて、妻を寝取られた男となるのだが、彼の不幸のキーワードは「落ちる」“falle(n)”である。さらに言えば「罨にはまる」“fallen in the snare” (3231) である。

下宿人のニコラスが二日間部屋から出てこなかったとき、ニコラスにだまされて、ジョンはこう言う。

This man is falle, with his astromye,  
In some woodnesse or in som agonye.

(3451-52)

「あの人は天文学なぞやったもんだから、少し気が触れちまったか、何かの発作でも起こしたんだ (is falle)」と、そして彼は知的好奇心に不信感をもちつつ、別の学生の逸話を披露する。

Men sholde nat knowe of Goddes pryvetee.  
Ye, blessed be alwey a lewed man  
That noight but oonly his bileve kan!  
So ferde another clerk with astromye;  
He walked in the feeldes for to pry  
Upon the sterres, what ther sholde bifalle,  
Til he was in a marle-pit yfalle;

(3454-60)

このように、ジョンは、学生が天文学に凝り過ぎて星を見つめながら歩いていたものだから、泥土の穴に落ちた (was in a marle-pit yfalle) ことを話す。その前に、人間は神の秘密を知ろうとすべきではない。信じるもの以外、何も知らないばかな人間のほうが幸せだ、と言い切る。

しかし皮肉にもニコラスが言う「神の秘密」である事件、天文学的予言をジョンは信じてしまう。そして彼自身があざ笑ったような事件を経験することになる。すなわち最後の場面で彼がニコラスに言ったとおりのことを、自分自身思わず知らず再現することになる。狭い籠に入った鳥のように、天井から吊るした桶の中に入って眠り込んでしまったジョンは、お尻に大やけどしたニコラスの「助けて、水、水」という叫び声に、「ノアの洪水が来た」と信じ込み、斧でロープを真二つに切ると、桶の中に入ったまま床板の上に落ち (doun gooth al) て気絶してしまう。

For what so that this carpenter answered,



It was for noght; no man his reson herde.  
With othes grete he was so sworn adoun  
That he was holde wood in al the toun;  
(3843-46)

この引用のように、いくら抗弁しても取り合ってもらえず、たくさんの悪口雑言でののしり倒され、町中で狂人扱いされてしまう。

すでに分不相応である若い人と老人が結婚するという、いわば罠にはまったジョンは、妻を寝取られ、騙されて罠にはまり、桶諸共に落ちて腕の骨を折り、苦痛に耐えねばならなくなった。彼は二度罠にはまる経験をして苦しむのである。

ここにジョンという信じやすく騙されやすい、しかも無知と愚鈍が同居する人物が活写されているのである。

こうして比喩的表現に焦点をあてながら、「粉ひき屋の話」の4人の登場人物の描き方とその性格を探ってみた。チョーサーの比喩的表現による人物スケッチは見事なものであるが、4人共バランスよく描かれているわけではない。事件の被害者のジョンと事件の首謀者で恋の勝利者のニコラスの人物描写は割合少なく、事件の因となるアリスンと恋の敗者のアブソロンの人物説明はそれぞれ大変詳しくなされている。そのためにアリスンとアブソロンの正反対の比較的複雑な性格づけはうまくいっている。ジョンの性格がもっとも典型的であったり、人物説明の長さにそれぞれ長短があったりするけれども、チョーサーは登場人物の性格づけと個性化を割合きちんと行い、筋については客観的相関物や伏線を配してまとめ、この下世話な話を喜劇文学の領域にまで高めているのである。

